

# 一般雑誌における性関連記事の若者への影響と 若者のニーズ (第2報)

## Influence of Sex Related Articles in Commercial Magazines for Adolescent and Adolescent's Needs for Sex Information

野々山未希子<sup>1), 2)</sup> 石川陽子<sup>1)</sup> 早乙女智子<sup>1)</sup>  
Mikiko NONOYAMA Yoko ISHIKAWA Tomoko SAOTOME  
劔 陽子<sup>1)</sup> 野田洋子<sup>1)</sup> 白井千香<sup>1)</sup>  
Yoko TSURUGI Yoko NODA Chika SHIRAI  
堀口雅子<sup>1)</sup>  
Masako HORIGUCHI

若者の持つ性情報の多くが、メディア情報と友人からの情報であると言われている。そこで本研究では、情報の受け手である若者の、メディアに対する利用度やニーズを質的に把握し、STD予防におけるメディアの役割を探る事を目的に、フォーカスグループインタビュー (FGI) を行った。若者の購読率の高い雑誌を媒体に、10歳代後半と20歳代前半の男女にFGIを行い、雑誌編集者へのインタビューと併せて、情報の受け手のニーズと送り手の意図を分析した。編集担当者がSTD予防に前向きな意図を示したにも関わらず、実際には男女誌とも情報の受け手である若者にとって、STD予防につながる情報は少なく、女性誌は「セックスに積極的な女性」、男性誌は「男性に都合のよい女性」を印象付ける内容であった。セックスの楽しさや、良好な性関係につながる意図はあまり伝わらず、雑誌の性情報から性行動のリスク、特にSTDの認識を得ることは期待し難かった。

Adolescents often obtain sex-related information from their peers and through mass media. The objective of this study is to clarify the need of adolescents for sex information through mass media, and explore the role of such media in terms of STD prevention.

Thirteen focus group interviews with 42 men and 46 women aged 15-24 years were used to gather qualitative data regarding sex information through media. We also interviewed editors of men's and women's magazines, which often provide sex information to adolescents, about their intentions when providing such information to adolescents.

Although the editors expressed willingness to provide information on STD prevention, little such information was actually offered in the sex-related articles. The focus group interview participants viewed such articles as "eroticism" or as showing "women as sex symbols" The participants did rely on articles with STD information supervised by medical professionals, however. The adolescents expressed a desire for mass media to provide reliable information, especially about contraception and STD prevention. Both genders wished to learn about the other gender's emotional and physical reaction in sexual relationships.

Sex information through mass media greatly affects adolescents' sexual behavior. More effort should be made to explore the utility of mass media as a means to prevent STDs.

*Key words : STD (Sexually transmitted disease), Commercial Magazines, education-media, adolescent, FGI (Focus Group Interview)*

1) 性と健康を考える女性専門家の会 : Professional Women's Coalition for Sexuality and Health

2) 国立国際医療センター : International Medical Center of Japan

平成14年3月27日受付、平成14年5月17日掲載決定

(〒104-0045)東京都中央区築地1-9-4 ちとせビル3F (朝日エル内) 性と健康を考える女性専門家の会 野々山未希子

## 緒言

わが国において若者の持つ性情報の多くが、一般雑誌などのメディア情報と、友人からの情報であることは多くの調査研究<sup>1), 2), 3)</sup>により報告されている。しかし、昨年度の我々の調査結果<sup>4)</sup>からは、一般雑誌に掲載されている性情報には、STD 予防の観点からは問題点も多いことが明らかになった。雑誌をはじめとするメディア情報は一方通行の情報提供のため、内容の分析だけではそれがどのように活用されているのかを検証することは困難である。そこで本研究では、情報の受け手である若者の、メディアに対する利用度やニーズを質的に把握し、メディアの性情報発信の意図と比較することにより、STD 予防におけるメディアの役割を探る事を目的とした。

## 対象と方法

若者が購読することを期待した雑誌を選択し、それを媒体に10歳代後半と20歳代前半の男女のグループにそれぞれ分けて、フォーカスグループインタビュー(FGI)<sup>5)</sup>を行った。同時に雑誌編集者へのインタビューを行って、記事内容について情報の受け手のニーズと送り手の意図を分析した。

### 1. インタビュー使用記事選択

- ① 広告代理店の雑誌媒体閲覧指数をもとに、若者(10歳代後半～20歳代前半)の閲覧指数が特に高い雑誌を選定した。
- ② 過去の性に関する特集記事掲載の有無を編集部を確認し、特集記事があると確認できた雑誌の該当記事を、大宅壮一文庫にて収集した。
- ③ その中から、性感染症についての記載があった記事を選定し、それらの記事について、各雑誌社のホームページより購買部数及び対象年齢層を再確認した後、対象記事を3誌に決定した。(女性誌2記事・男性誌1記事)

### 2. フォーカスグループインタビュー (FGI)

- ① 調査期間：2001年8月～2002年2月 10歳代後半から20歳代前半の若者を対象とし、養護教諭等を

通じて東京都内と福岡県内の全日制高校生、定時制高校生、及び大学生に協力を依頼した。

- ② インタビュー開始前に、研究者よりFGIの目的、方法、結果の公表などの説明を行い、同意書にて調査参加の意思を確認した後に、録音を開始した。
- ③ はじめに、性関連情報の入手源、今後利用したい情報源及び、普段読む雑誌名に関するアンケートを実施した。
- ④ FGI用に用意した男性誌、女性誌のSTD関連記事それぞれ1つに目を通してもらい、記事及びメディアの性情報に関するインタビューを行った。
- ⑤ インタビュー時間は90分前後とし、研究者が司会及び観察者として参加した。
- ⑥ FGIの記録はすべて同意のもとに録音し、逐語録を作成した。
- ⑦ メディア情報に関する発言のみを取り出し、キーワードを作成後、KJ法にて分析した。KJ法とは、質的データを一行の文章からなる一枚のカードにおこし、カードのグルーピングにより、小グループ→中グループ→大グループに分類し、小、中グループ間の関連や、大グループ間の相互関連を検討することにより、事象が表す概念を明確化する質的データ分析法である。

### 3. メディアインタビュー

- ① FGIに使用した3記事(女性誌2記事・男性誌1記事)及び、同年代の購買部数が高い男性誌1記事の雑誌編集担当者にインタビューを依頼した。
- ② インタビュー内容は、性関連記事掲載の方針、STD予防におけるメディアの役割とし、半構造化面接を行った。半構造化面接とは、自由応答式の質問形式をとり、質問事項の内容は大まかに決められているが、詳細や順序は被面接者の自発的な発話により、柔軟に変化する面接法である。この面接法では、調査者の研究課題と被面接者の関心双方を収集できる利点がある。
- ③ インタビュー内容はすべて録音し、逐語録を作成した。

結果

1. フォーカスグループインタビュー (FGI)

インタビュー回数は13回であった。対象者の募集は6人~10人としていたが当日の欠席者の補充は行わず、最終的には4~10人であった。また1グループのみ、男女混合であった。参加者の内訳は Table 1 及び Table 2 に示す。

Table 1 Number of participations

	Male	Female	Total
Senior high school students	27	26	53
University students	15	20	35
Total	42	46	88

Table 2 Age of participations

Age	Male	Female	Total
15	2	5	7
16	16	3	19
17	4	10	14
18	1	11	12
19	4	3	7
20	1	2	3
21	7	2	9
22	3	3	6
23	3	4	7
24	1	3	4
Total	42	46	88

1) STDの知識

全てのグループでのインタビューで「エイズ」の名前は挙げられており、他には「淋病」「梅毒」「クラミジア」「ヘルペス」「毛じらみ」の疾患名が挙がるなど、STDの名前は広く知られていたものの、ほとんどの参加者が症状や感染経路などの知識は今まで無かったと答えた。漠然とセックスでSTDがうつると捉えていたが、医学生も含めて、安全な性行為と危険な性行為の違いや各疾患の症状について正確に把握できている参加者はいなかった。

2) 有用なメディア情報

使用した記事の中で有用だと思う情報は、STDの診断や治療、具体的な避妊法等であった。特に、STDについて友人に聞くことに抵抗がないと答えた女性はおら

ず、多くの男性が友人同士で相談できると答えているのに対し、雑誌からの情報を有用だとする意見が多かった。男性では、避妊は男の責任としてメディアから積極的に避妊に関する情報収集をしようとする者もあったが、「妊娠は女性のこと」としてあまり興味のない者まで幅がみられた。また、男性はハウツー・セックスの情報源としてアダルトビデオを利用していた。以下インタビュー内容から得られた意見を抜粋する。

<メディアを利用する理由>

- 仲のいい友達であっても性については聞けないので、雑誌が有用 (大学生女子)
- 避妊、風俗、性病、コンドームのつけ方について掲載された記事が役に立つ (高校生男子)
- 婦人科受診の際のポイントが書かれていて有用 (高校生女子)
- アダルトビデオは、その行為にいたるまでの勉強になり一番わかりやすい。(高校生男子)

3) メディア情報の信憑性

使用した記事の中で信用できる情報は、婦人科受診の重要ポイントなど、女性誌の医学的な内容であった。反対に信用できない内容としては、ペニスの大きさや1日のセックス回数、過激なセックス体験談などの項目が挙げられた。

<信頼できる理由>

- 見出しに「きちんと勉強しておきたい〜」と表現されている (大学生女子)
- 記事中にアンケートや統計データなどの数字がある (高校生男子)
- 監修者に医師の名前が明記されている (大学生女子)

<信頼できない理由>

- 雑誌とは「どうでも良いこと」を載せて、本当に大事なことは載っていないものである (高校生女子)
- テレビでは視聴率、本は購買数向上のため見る人の喜ぶものを作ったり書いたりしているため、何を信じて良いのか全くわからない (高校生男子)

4) メディアの影響

常識・平均などの言葉に影響を受ける、男性では、セックスのテクニックやアダルトビデオの内容は模倣したくなるなどの意見が、特に高校生に多かった。また、男

女共にメディアのSTD情報が受療行動に繋がった例もあった。

＜平均化への圧力=ピアプレッシャー＞

- ・ペニスの大きさ（高校生男子）
- ・初体験の年齢（大学生男子）
- ・セックスの快感：自分も同じような体験を味わいたくなる（高校生男子）

＜受療行動への影響＞

- ・テレビを見てエイズ検査をした（高校生男子）
- ・生理不順の不安について参考にした（大学生女子）

5) 女性誌と男性誌の比較

女性は、女性誌については字の細かさや字数の多さから情報量を多いと感じていたが、体の仕組みやSTD、避妊についてのまじめな項目については、情報内容に期待をしていた。男性誌については自己中心的なセックスの経験談などに嫌悪感をもっていた。男性においても、男性誌の過激な性行動は全ての男性に当てはまるものではなく誤解されやすいと批判的に捉えていた。

＜女性誌への意見＞

- ・妊娠やSTDを重視している（高校生女子）
- ・どの雑誌でも医師が受け答えしてまじめ（高校生女子）

＜男性誌への意見＞

- ・男のロマンを感じる（高校生男子）
- ・妊娠やSTDを重視しておらず、妊娠について男性は責任を感じていないと思える（高校生女子）
- ・内容の多くがアンケートで、全部でたらめだと思う（高校生男子）
- ・男性誌を女性が見たら、嫌な気分になると思う（高校生男子）
- ・男性誌の方が興味本位で、レイプの記事などもあり、煽っている（高校生女子）

6) メディアへの要望

STDや避妊について正しい情報提供をして欲しい、男女双方に異性の気持ちや身体のことを理解できるような情報を載せて欲しい、セックスの楽しさや大切さとともにセックスにまつわるリスクも正確に扱って欲しいといった意見が多かった

＜メディアに要望したいこと＞

- ・「神様、少しだけ」のような、STDに関する番組を放送してほしい（高校生男子）
- ・男女双方の気持ちが理解できるように、「男の気持ち」「女の気持ち」を対照して欲しい（高校生男子）
- ・セックスするときはどうすれば異性を喜ばせてあげられるか、そういう教科書にはない情報もほしい（大学生女子）

2. メディアインタビュー

FGIに使用した3記事の編集長宛にインタビュー依頼を送り、記事担当編集者に改めてインタビュー依頼を行ったところ、女性誌Cからは快諾を得られた。しかし、女性誌A及び男性誌B編集担当者からは、社の方針に関するインタビューには応じられないとの理由により拒否された。そのため、同年代の男性の購買部数が多く、記事内容が男性誌Bに近かった男性誌Dにインタビューを依頼し、快諾を得られた。

女性誌Cは、性関連記事掲載にあたり、読者（20～30歳代）にセックスは楽しいもので、同世代のセックスのあり方を知り、性のトラブルには本書を参考に対応して欲しいという方針を示していた。男性誌Dは、読者（10～20歳代）が相手の気持ちになって女性に好かれる性行動ができるように、特に経験のない男性に正しい知識を伝えたいという方針を示していた。

両誌に共通していたのは、記事中に読者インタビューを利用していること、セックス特集は年1～2回を目安としていること、体験談ではウソは書かないが興味あるものはトピックスにする（誇張することはある）こと、STD予防に専門医のメッセージと医学監修を採り入れていることであった。

考 察

インタビューに応じた編集担当者は、性情報について、できるだけネガティブでなくポジティブに性を捉える意図を持っていたが、「興味深い」「嘘ではない」ことを経験談に頼ることで、情報の受け手には逆に「嘘っぽい」と感じさせていた。また、読者アンケートや統計的な数字を挙げることで性行動の平均を示す工夫もあったが、受け手には「自分も人並みでありたい」と思わせてしまうため、いわゆるピアプレッシャーにより性行動の若年

化や逸脱化を助長することにもなりかねない。ピアプレッシャーは、若年者の性行動に重大な影響を与えるものである。同世代に、自分を尊重し、よりよいものでありたいという意識（セルフエスティーム）があり、性規範や性行動に鑑識がある場合は、むしろSTDの回避に重要な影響力を持つといわれている<sup>9)</sup>。メディア情報の中で、性の自己決定やコンドームの常時使用などは、ピアプレッシャーをピアエデュケーションとして活用できるような伝達の仕方が期待される。

女性誌の「セックスの楽しさを伝える」という意図と、男性誌の「相手の気持ちになって女性に好かれる性行動ができるように、特に経験のない男性に正しい知識を伝達する」という意図は、受け手に伝わっているとは言い難く、女性誌の記事は「セックスに積極的な女性」、男性誌では「男性に都合のよい女性を描いている」と捉えられていた。

また、男女それぞれが「男ってひどい」「男ってこんな奴ばかりではない」と感じたように、誇張した記事は性に関する男女のコミュニケーションを阻害するものになり得る。一方、親しい男女の間では、記事が媒体と

なりパートナー間に存在するジェンダーバイアスについて話し合うきっかけとなる可能性も持つであろう。さらに、男女とも性行動そのものより異性の気持ちを知りたいという本質的な「愛情」を探る意図も伺えたのは、思春期から青年期への若者の特徴とも言えるのではないだろうか。

STDや避妊等の知識を得たい、という若者のニーズに対して、「性のトラブル対処方法を知らせる」という編集者の意図は合っているものの、セックスのハウツーものに比べ避妊やSTDに関する情報は少なく、STD予防行動への動機付けとなるような記事を期待することは難しいといえる。

親・学校・地域社会からの性情報は性のモラルやタブーという形で若者の性行動を抑圧する方向で発信されることが多いのに対し、若者向けメディアからの性情報はセックスの楽しさ、ハウツー・セックスを伝えるなど性行動を促進する形で発信される。それと同時に、メディアのセックスに関するトラブル対処といった情報は産婦人科受診へのバリアーを低くする役割も持つ。

しかしながら男らしさ、女らしさ、つまり性欲は男の

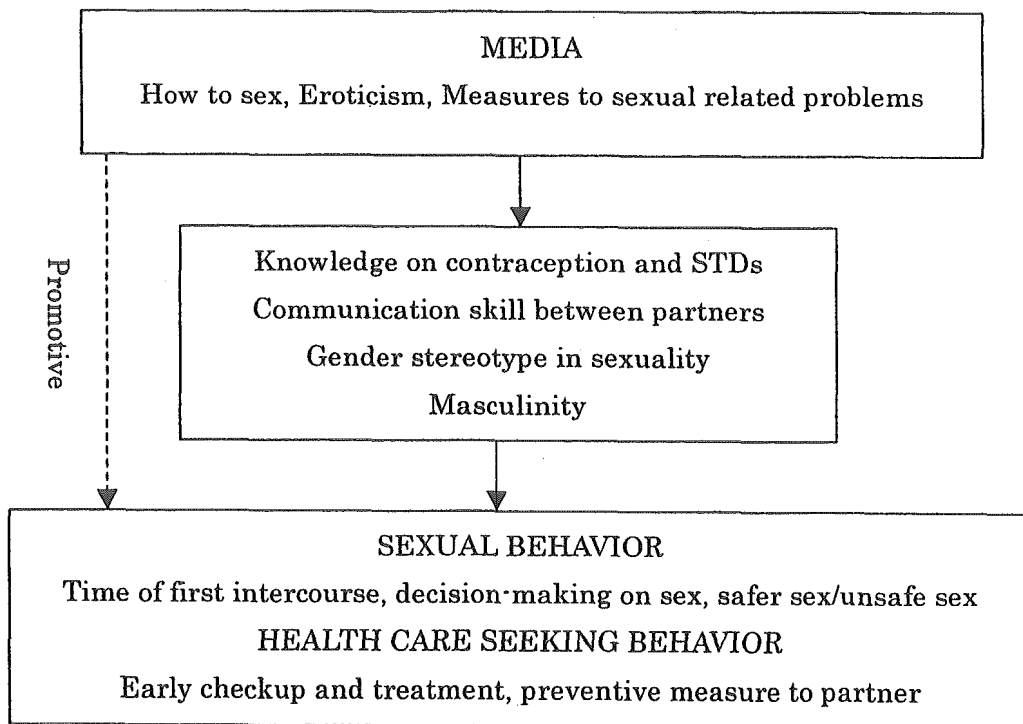


Fig. 1 Media's effect on young people's sexual behavior

本能であり、女は受身、といったステレオタイプの考え方が男女間のコミュニケーションスキルを弱めていると考えられる (Fig. 1)。

若者にとって必要な性情報は、パートナーを理解し、愛情表現としての性行動の満足度を高めるとともに、リスクを回避できる知識や動機づけである。FGIの結果、男子高校生の多くがメディアの情報を平均の圧力として感じてしまい、模倣したくなるという意見があった。しかし、女性や大学生では情報に惑わされてはいけないという意見にグループの全員が賛成するなど、氾濫するメディア情報を選択しようとする目を持っていることも示唆された。メディアがより有効に利用されるためには情報の送り手と受け手とのギャップを埋めていくことが重要であろう。

男性は性情報をアダルトビデオやインターネットから得る機会が女性より多いことが既報告にあるが<sup>3)</sup>、今回の調査でも男性が情報源としてビデオなどを利用していることが明らかであり、今後このようなメディアも調査対象とする必要があるといえる。

今回のインタビューを主にした質的な調査は、アンケートなど集団や多数の傾向を見る量的な調査とは異なり、数値化が客観的な指標にはなりえない。しかし、量的調査を掘り下げ若年者の視点での性意識や性行動を引き出し分析することができた。STD 予防のためには感染拡大の社会的要因を探り、対象者に合わせた啓発の方向性を見出す必要がある。今後は、質的調査と量的調査の調査結果をあわせて、効果的な予防啓発方法を確立していくことが重要であると認識した。

## 結 語

主に雑誌における性情報は、若者の関心を集めるものであるが、今回の質的な調査では、情報の送り手と受け手の認識の違いが大きかった。若者の望む情報は、それぞれ異性が性についてどのような思いがあるかを知ることや、STD 予防や避妊の具体的な方法であることがわかった。メディアへの医療関係者の関与は若者のメディア情報への信頼を高めていることから、メディアを通じた性情報発信における専門家の責任は大きいといえる。

## 付 記

本研究は、日本性感染症学会第14回学術大会（東京都2001年12月2日）に発表したものに加筆修正したものである。最後に、本調査にご協力をいただいた高校生・大学生・教員の方々及び編集者諸氏には深謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 婦人青少年部による調査—男女平等に関する都民の意識調査—：東京都生活文化局編，1994年。
- 2) 「全国国立大学生 Sexual Health Study」調査報告書：厚生科学研究報告，2000年。
- 3) 「若者の性」白書 第5回 青少年の性行動全国調査報告：（財）日本性教育協会編，小学館，2001年5月。
- 4) 野々山未希子ほか：一般雑誌におけるSTD関連記事の傾向（第1報）。日性感染症会誌，12(1)：84-90，2001。
- 5) 「グループインタビューの技法」：井下理，慶応義塾大学出版会，2001年6月。
- 6) SEXUALLY TRANSMITTED INFECTIONS：BRIEFING KIT FOR TEACHERS：WHO Regional Office for the Western Pacific STI, HIV and AIDS Focus, 2001。

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）  
分担研究報告書

無症候クラミジア感染の実態調査

分担研究者 今井 博久（宮崎医科大学公衆衛生学講座講師）

研究要旨

サーベイランスにより有症状の性器クラミジア感染患者が急激に増加していることが報告されている。しかしながら、その数倍は存在すると指摘されている無症状の感染者の感染率や危険因子は明らかにならなかった。そこで、性活動が活発な若年男女を対象に据え無症候性の性器クラミジア感染症の有病率と危険因子を同定することを目的とした。ある県内の一般学生 3176 名の早朝初尿を用いて PCR 法により感染の有無を診断した。また質問票により性行動を尋ねた。その結果、感染率は 8.7%（女性 9.9%、男性 6.9%）であった。年齢別では、女性は年齢が上がるにつれて感染率が低くなった。男性は一貫した傾向はなかった。性的パートナー数では、女性は多ければ多いほど感染率が高かったが、男性は違っていた。コンドーム使用では、使用していない女性は 13.3%、男性は 10.5%の感染率であった。結論として、一般の学生たちにおける無症候性の性器クラミジア感染の感染率は高く、蔓延していることが明らかになった。また無防備な性行動が背景にあり、実効性のある性教育が必要と考えられた。

A. 研究目的

性器クラミジア感染症は、日本において最も一般的な細菌性感染症である。性器クラミジア感染の臨床徴候および症状は軽度または非特異的な場合が多いため、感染女性の実に 70%～80%が無症状で過ごしていると言われている。クラミジア感染症を治療しないために発生する合併症には、女性では骨盤感染症、不妊および子宮外妊娠など、男性では尿道炎、陰嚢腫脹などがある。性器クラミジア感染症は、こうした治療費が高く医療経済上大きな負担になり、また生殖器に対して重篤な疾患へ進展する疾病である。性活動が活発である若年者は感染のハイリスク群である。特に、学生に対してはリスク

因子や感染率の調査が精力的に実施されてきており、感染した多くの学生たちは無症候性感染であるためにスクリーニングが推奨されてきた。欧米では、90年代半ばころより尿検体を使用してポリメラーゼ連鎖反応（PCR）の DNA 増幅検査が利用され、高感度および特異的にクラミジア感染症を非クリニックセッティングで多くの人たちを費用効果的にスクリーニングすることが可能となった。

日本の教育機関では、学生を対象に性器クラミジアに関するスクリーニング制度がなく、いわゆる症状のない無症候性性器クラミジア感染の有病率データはない。若い男女学生は、潜在的にクラミジア感染症に罹患するリスクが特に

高く、また予防活動に関する優先対象グループである。これまでいくつかの教育機関を対象にした調査や単一の学校を対象にした報告はあるが、選択バイアスが大きく、非常に幅のある値しか出ていなかった。公衆衛生学的対策を立案するために用いるのに可能な無症候性性器クラミジア感染症の感染率はない。また、健康日本21における母子保健版の健やか親子21では、4本柱のひとつとして「10代の性感染症率を減らす」という目標を立てているが、根拠にすべき感染率は明らかになっていない。すなわち、若年者の有症状の感染率は明らかになっているが、無症状の感染率はまったく明らかになっていない。

そこで、一般若年学生を対象とした実態調査研究を計画した。今回の研究目的は、あるひとつの県において無症候の一般若年学生間におけるクラミジア感染症の有病率と危険因子を検討することである。

## B. 研究方法

### (1) 対象

ある県内の専門学校と大学（短大を含む）に所属する18歳以上の一般男女学生3176名を対象にした。

### (2) 検体収集

尿検体提出日の早朝初尿を専用容器に入れて提出してもらい、尿DNA増幅アッセイ（PCR法）を用いて診断した。

### (3) 陽性者と陰性者の性行動比較

調査参加者から質問票を使用して性活動に関する情報を匿名性にて回答してもらった。診断結果と質問票から陽性者と陰性者の性行動比較に関する情報を得た。

### (4) 研究参加者への説明と同意

本研究の目的、内容、結果の公表などに関して口頭と書面によって説明と同意をおこなった。同意の得られた参加者のみを対象とした。調査により得られた情報は、番号化および匿名化され厳重に管理した。参加の有無によって医療上、

経済上、その他について差別を被ることは一切ないようにした。

## C. 研究結果

- (1) 対象はある県の専門学校と大学に在籍する一般学生とした。対象人数は3176名で男性1307名、女性1869名だった。性交渉の経験があったのは、男性769名（58.8%）、女性1187名（63.5%）であった。
- (2) クラミジア陽性率は全体で8.7%（170/1956）となり、男性が6.9%（53/769）で女性が9.9%（117/1187）であった。陽性率は女性の方が高かった。表1に示した。
- (3) 年齢別をグラフ1に示した。女性では年齢層が若くなればなるほど、感染率が上昇していた。男性では一貫した傾向は見られなかった。
- (4) クラミジア陽性と性経験人数の関係を男女別に表2と3に示した。女性では、人数が増加すればするほど、感染率は増加し、特に4人以上の性経験がある場合、5人に1人がクラミジアに感染している結果であった。男性では、一貫した傾向は認められなかったが、5人以上になると感染率が増加していた。
- (5) コンドームを使用するとコンドームを必ずしも使用しない人の感染率を比較すると、男性では4.6倍、女性では3.2倍であった。
- (6) 性感染症の既往歴と感染との関係については、男性では性感染症の既往歴がある場合は21名中4名（16.0%）が陽性で、既往歴がない場合は696名中48名（6.5%）が陽性であった。女性では性感染症の既往歴がある場合は70名中14名（16.7%）が陽性で、既往歴がない場合は995名中102名（9.3%）が陽性であった。性感染症の既往歴がある場合は無



い場合の感染率と比較すると、男性では2.5倍女性では1.8倍であった。表6と7に示した。

#### D. 考察

ひとつの県内の大学および専修職業学校の無症候の性行為経験を有する18歳以上の男女学生におけるクラミジア・トラコマチス有病率は8.7%（女性：9.9%、男性：6.9%）であった。これまでいくつかの無症候クラミジア感染の感染率が報告されている。イギリスのナショナル・サーベイでは、年齢別の有病率が最も高い年齢層は、女性では16-24歳で有病率は3.0%、男性では25-34歳で有病率は3.1%であった。対象がどのような集団に設定されたかによって感染率は幅広い範囲を持つけれども、国際的に比較すると、日本の感染率は他の国々より高く、無症候のクラミジア感染が日本の学生たちに広く蔓延していることが示唆された。

いくつかの危険因子が独立して同定され、それらは女性学生と男性学生の間で差異が認められた。私たちは、クラミジアの感染率が女性の年齢が若くなると直線的に増加したことを見つけた。米国の軍の女性新兵を対象にした大規模調査と一致していた。しかしながら、男性においてはクラミジアの感染率と年齢の関係は一貫していなく上下し、これまでの報告と一致しなかった。

一般学生の中に潜在的にクラミジア感染が蔓延していることが明らかになった。日本国内の性感染症センチネル・サーベイランス報告によると、症状が有って医療機関に受診している患者を対象に調査したクラミジアの有病率が1990年から女性で約3倍、男性で約1.5倍になっており、今後も増加し続けると予想されている。日本のHIV感染率は国際的に比べると低い、クラミジア感染症に感染している場合、HIVの感染率が通常の場合の3倍から5倍も高くなることが指摘されており、加えて、感染後に無症候という点でHIVも同じ特徴を持つ

ので、現在のクラミジア感染状況は、HIV感染が容易に蔓延することを示唆している。今後は、18歳以上の学生たちでなく、高校生に対してもコンドーム使用を勧める効果的な実践的な性教育プログラム開発し、徹底的に実施すべきであろう。

#### E. 結論および提言

- ・ 無症候クラミジア感染が、一般の学生の中に蔓延していることが明らかになった。国際比較しても感染率は最悪状態である。早急に、予防対策を講じるべきである。
- ・ どのようにすれば費用効果的に優れたスクリーニングが実施可能か検討すべきである。
- ・ 女子学生では、「年齢」が決定因子と考えられ、高校あるいは中学で具体的な予防の教育をすべきである。
- ・ 男子学生と女子学生では、性行動や、感染の危険因子が異なるため、両者の画一的な性教育をやめて、危険因子に基づいた効果的で具体的な予防の性教育をすべきである。

#### F. 健康危険情報 なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- (1) H Imai, et al: Prevalence and risk factors of asymptomatic Chlamydial infection among students in Japan. International Journal of STD and AIDS (forthcoming)

##### 2. 学会発表

- (1) 今井博久、濱砂良一、熊本悦明：一般若年者の性器クラミジア感染 第15回日本性感染症学会 2002年（福岡）
- (2) 濱砂良一、長田幸夫、今井博久：無症候性クラミジア感染症患者のクラミジア咽頭陽性率と治療 第15回日本性感染症学会 2002年（福岡）

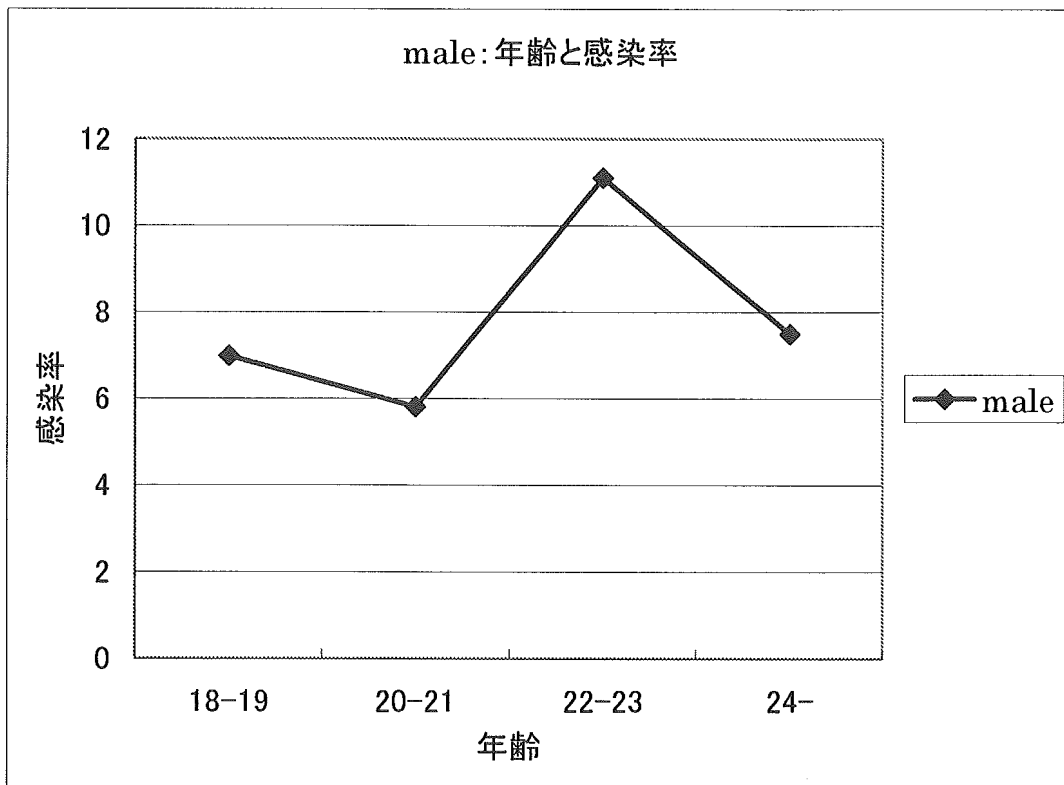
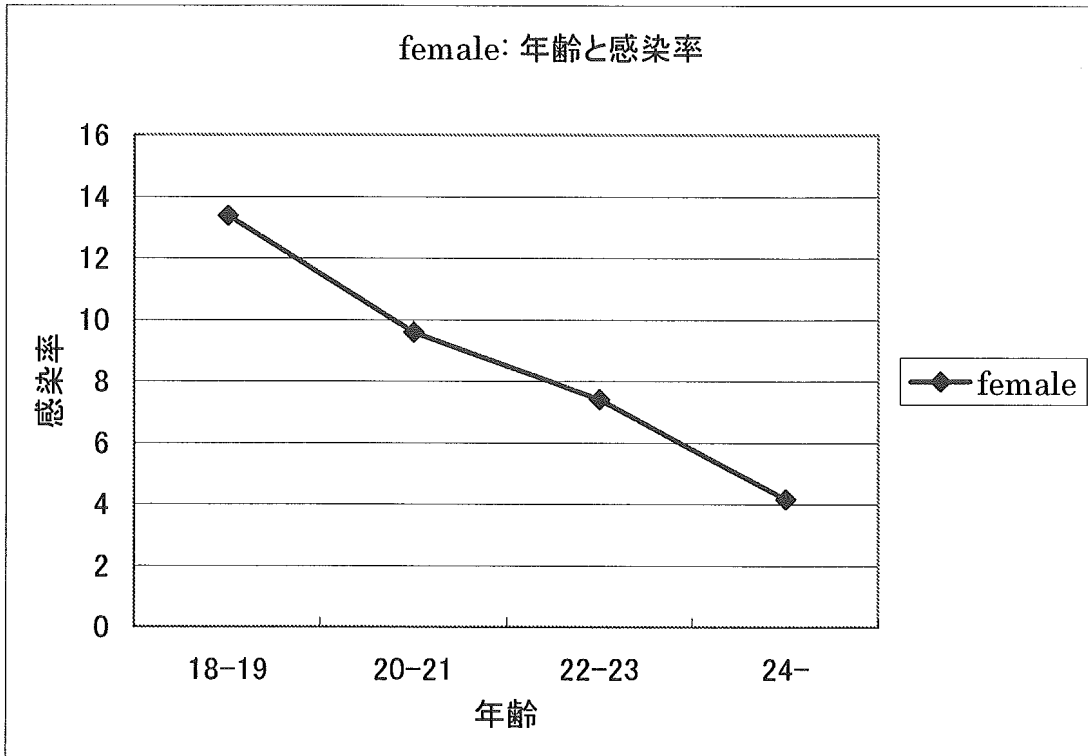
H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし

3. その他 なし

表 1. 感染率

	男性	女性	全体
陽性率	6.9%	9.9%	8.7%
人数	53/769	117/1187	170/1956



グラフ 1. 年齢別感染率

表 2. 性経験人数と感染率（女性）

女性：性交人数	陰性	陽性
1	97.2%	2.8%
2	94.1%	5.9%
3	92.9%	7.1%
4	79.9%	20.3%
5 or more	80.2%	19.8%
全体	90.1%	9.9%

表 3. 性経験人数と感染率（男性）

男性：性交人数	陰性	陽性
1	95.9%	4.1%
2	92.7%	7.3%
3	95.7%	4.3%
4	92.9%	7.1%
5 or more	88.4%	11.6%
全体	93.1%	6.9%

表 4. コンドーム使用と感染率（女性）

女性	陰性	陽性
使用しないこともあった	86.7%	13.3%
いつも使用していた	95.9%	4.1%
全体	89.9%	10.1%

表 5. コンドーム使用と感染率（男性）

男性	陰性	陽性
使用しないこともあった	89.5%	10.5%
いつも使用していた	97.7%	2.3%
全体	93.0%	7.0%

表6. 性感染症の既往歴と感染率（女性）

女性	陰性	陽性
ない	90.7%	9.3%
ある	83.3%	16.7%
全体	90.2%	9.8%

表7. 性感染症の既往歴と感染率（男性）

男性	陰性	陽性
ない	93.5%	6.5%
ある	84.0%	16.0%
全体	93.2%	6.8%

### Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
熊本 悦明	この性感染症流行の現状を直視して欲しい	日本性感染症学会誌	13 (1)	14-15	2002
熊本 悦明, 塚本 泰司, 利部 輝雄, 赤座 英之, 野口 昌良, 高杉 豊, 守殿 貞夫, 碓井 亜, 香川 征, 内藤 誠二, 箕輪 眞澄, 谷畑 健生, 澤畑 一樹	日本における性感染症 (STD) サーベイランス—2001年度調査報告—	日本性感染症学会誌	13 (2)	147-167	2002
熊本 悦明	正しい性教育には正しいデータを	保健体育ジャーナル	63	1-2	2002
熊本 悦明	性のあるところに感染あり 性感染症/エイズは増えている	メディコピア	43	21-35	2002
熊本 悦明	中学・高校における性教育を見直すときが来ている—生徒たちの性の実態を直視しなければならぬ—	保健体育ジャーナル	65	5-12	2003
齋藤 益子, 熊本 悦明, 木村 好秀, 五島瑳智子, 三宅 一義	膣分泌物自己採取法による <i>Chlamydia Trachomatis</i> のスクリーニングと性行動との関連性—看護学生を対象として—	日性感染症会誌	13 (1)	96-103	2002
蛸名 紀子, 南 邦弘, 中野 茂行,	生理用ナプキンを用いての自己採取による <i>Chlamydia trachomatis</i> 検査法の有用性に	日性感染症会誌	13 (1)	104-107	2002



前田 信彦, 熊本 悦明	ついて				
熊本 悦明, 島崎 継雄, 北村 邦夫, 加藤 鷹	最近の若者の性やAVの問題に ついて—俳優加藤鷹との炉辺談 話	性と健康	2	21-27	2002

#### IV. 研究成果の刊行物・別刷

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
熊本 悦明	この性感染症流行の現状を直視して欲しい	日本性感染症学会誌	13 (1)	14-15	2002
熊本 悦明, 塚本 泰司, 利部 輝雄, 赤座 英之, 野口 昌良, 高杉 豊, 守殿 貞夫, 碓井 亜, 香川 征, 内藤 誠二, 簗輪 眞澄, 谷畑 健生, 澤畑 一樹	日本における性感染症 (STD) サーベイランスー2001年度調査報告ー	日本性感染症学会誌	13 (2)	147-167	2002
熊本 悦明	正しい性教育には正しいデータを	保健体育ジャーナル	63	1-2	2002
熊本 悦明	性のあるところに感染あり 性感染症/エイズは増えている	メディコピア	43	21-35	2002
熊本 悦明	中学・高校における性教育を見直すときが来ているー生徒たちの性の実態を直視しなければならないー	保健体育ジャーナル	65	5-12	2003
齋藤 益子, 熊本 悦明, 木村 好秀, 五島瑳智子, 三宅 一義	膣分泌物自己採取法による <i>Chlamydia Trachomatis</i> のスクリーニングと性行動との関連性ー看護学生を対象としてー	日性感染症会誌	13 (1)	96-103	2002

蛭名 紀子, 南 邦弘, 中野 茂行, 前田 信彦, 熊本 悦明	生理用ナプキンを用いての自己 採取による <i>Chlamydia</i> <i>trachomatis</i> 検査法の有用性に ついて	日性感染症会誌	13 (1)	104-107	2002
熊本 悦明, 島崎 継雄, 北村 邦夫, 加藤 鷹	最近の若者の性やAVの問題に ついて—俳優加藤鷹との炉辺談 話	性と健康	2	21-27	2002